

リハビリテーション病院の多職種で取り組む高位頸髄損傷患者の退院支援

病院 看護部 3階東病棟 神谷靖子、大河原亜紀子、柳下貴巳

【背景】 リハビリテーション病院では対象である患者が生活者へ変化していくため、多職種は多角的に患者と関わる必要がある。看護師以外の多職種の志向性を知ることは患者を中心とした問題解決のために協働できると考える。**【目的】** 高位頸髄損傷患者を担当した多職種が行った退院に向けてのタイミングとアプローチを明らかにし、退院支援の一助となることを目的とする。**【方法】** 研究依頼時の2年以内に高位頸髄損傷患者を担当したことのある医師3名、理学療法士3名、作業療法士3名、言語聴覚士3名、医療ソーシャルワーカー2名、計14名を対象者とした。2019年10月初旬～10月末日に、対象者1名に対し研究者2名で14分～30分の半構造化インタビューを行い、逐語録をコード化し類似したものを集めカテゴリーを作成した。**【倫理的配慮】** 所属する施設の倫理審査委員会の承諾を得た。研究趣旨、参加は自由であること、及び結果の公表について説明し、書面による同意を得た。**【結果】** 多職種で取り組む退院支援アプローチとして、290のコードから56のサブカテゴリー、5つのカテゴリーが抽出された。〈患者の障害の受け止め方をみながらタイミングを計る〉では、頸髄損傷による四肢麻痺の受け止め方の変化を慎重にみながら、電動車椅子、訓練、退院先、今後の見通しについて話すタイミングを計らっていた。〈患者の意向を引き出す〉では、現実的と離れた予後を想像する患者に対して、生き方から日常の過ごし方まで、色々なレベルで患者がどうしたいのか、表現できるように働きかけていた。〈患者の生活を支える体制を整える〉では、学校や家族・ヘルパーに、障害者の理解、介助について説明し、患者と家族が継続していける体制づくりを行っていた。〈多職種の専門性と役割を発揮する〉では、患者と介助者との関係性、療養を取り巻く環境等を理解し、疾患や障害を持ちながらの生活について、専門性を発揮して支援していた。〈多職種連携〉では、職種の専門性を尊重して情報を補い合いながら連携していた。**【考察】** 多職種は期待と現実のギャップを縮め環境・社会的な次元に向けての支援につなげていた。それぞれの専門性を発揮し、生活に沿った機器の使用、先を見越した介助方法を提案していると考えられる。頸髄損傷患者は突然の受傷により、家族や環境、暮らし方、将来をも大きく変えてしまう複合的な障害であるため、多職種の重なり合う身体的・精神的な支援の連携が必要である。病棟看護師は四肢麻痺の介助と慢性的な健康管理、心理的援助を行っており、これは多職種が障害の受け止め方をみながら関わっていることと共通している。そのため看護師も多職種との情報共有はより重要であり障害の受け止め方など精神面に合わせた関わりが大切である。